

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

What Chinese language period does "Gaiding Yuanxian Chuanqi (改定元賢傳奇)" Exemplify?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/627">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/627</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 『改定元賢傳記』はどの時期の言語を 反映しているのか？

佐藤晴彦

### はじめに

元雜劇の重要な版本の一つに、李開先が編んだとされる『改定元賢傳記』がある。『改定元賢傳記』は『元刊雜劇三十種』に続く元曲の曲選本であり、明代で最初の元雜劇の曲選本として早くから注目されてきたが、残念ながらその所在さえ不明であった。しかし、最近になり、ようやく『改定元賢傳記』が南京図書館に蔵書されているということがわかった。所在は分かったものの、それを実際に目睹した研究者はそれほど多くはいなかったらしい<sup>(1)</sup>。最近になって、赤松紀彦氏が現物を実際に調査、検討され、「陳搏高臥」「青衫涙」の校勘記を付して、赤松紀彦2001で報告された。ここにより『改定元賢傳記』の一斑が公になったという意味で、この報告は非常に貴重なものであった。

ところがその後、その『改定元賢傳記』が『續修四庫全書』に収められていることを小松謙氏から教わったうえ、複写も忝くした。長年見たいと思っていた資料が、これほどたやすく見ることができるとは考えもしなかったので、感慨もひとしおであった。筆者の関心事は、「『改定元賢傳記』は、『元刊雜劇三十種』に代表されるような元曲の旧をどれほど残しているのか」という一点にあり、小論は筆者の検討の結果を報告しようというものである。

本論に入る前に、小論での方法論を説明しよう。

## 1. 小論での方法

言語を歴史的に研究する場合、音韻、文法、語彙といったいくつかの分野が考えられる。この三つの分野のうち、語彙の分野が、ある資料が何時出版されたかを判定するのに最も威力を発揮しそうであるが、出版時期を判定するその語彙の選択が非常に難しいであろうし、さらにたとえ語彙選定ができたとしても、数十年単位での言語変化を判定するとなると、やはり無理であろう。

ではこの三分野のいずれも不適當だとなれば、何を根拠として、短期間の言語変化を観察すればいいのであろうか。筆者は文字表記を根拠にすることを主張したい。中国語ならば漢字である。漢字の異体字の変化を根拠とするのである。

例えば、Aという文字があるとしよう。この文字の異体字にA<sub>1</sub>, A<sub>2</sub>, A<sub>3</sub>, A<sub>4</sub>という四種の異体字があったとする。その場合、A<sub>1</sub>, A<sub>2</sub>, A<sub>3</sub>, A<sub>4</sub>という四種の異体字が同じ時期に同時に出現するというのはまず考えられないことで、出現に前後関係があるのが一般的である。その出現の前後関係を、出版時期が明らかな資料を利用して、まず明確にする。それらの異体字の前後関係が明らかになれば、それを根拠として、成立時期、あるいは出版時期不明な資料の成立時期、出版時期を推定できるであろうという方法である。

### 1.1 どういう異体字を取り上げれば効果的か。

次に、では『改定元賢傳記』の出版時期を判断するには、どういう異体字を根拠にするのがいいのかということが問題となる。筆者は語気助詞の“哩”，形容詞の“慌”，兼語動詞の“教”，副詞の“原来”と方位詞“里”，量詞“个”の六つに注目したい。何故これら六つの異体字を利用するのが有効なのか？まず“哩”“慌”“教”“原来”を見ていくことにする。

### 1.2 四文字の変遷

哩 [語助]: 語気助詞の“哩”は、唐五代では“里”とか“裏”と表記された。宋代でもふつう“裏”もしくは“里”が使われる。“哩”は元

曲によく使われるが元刊本では“里”が使われているから，“哩”を元代のものだとするのは疑わしい。<sup>(2)</sup>明初になると“俚”“裡”“哩”などの表記が出現し、後に“哩”という表記に収斂していく。<sup>(3)</sup>清代になり l から n への音韻変化が起こり，“呢”となった。<sup>(4)</sup>

慌 [形容詞]: 「慌てる」の意味で“荒”を使うのは、唐代からすでにあった。これに「立心偏」がつき、“慌”となったのは明代以降のことである。<sup>(5)</sup>

教 [兼語動詞]: 兼語動詞の“教”は上古から使われていた。唐代になり“交”が出現し、“教”と併用されるようになり、<sup>(6)</sup>明代になると、徐々に“教”に統一されていくようになる。<sup>(7)</sup>

原来 [副詞]: “yuanlai”という語は唐代では“元来”と書かれており、<sup>(8)</sup>“原来”と書かれるようになったのは明代からである。<sup>(7)</sup>

以上見てきたように、この四つの文字の異体字はそれぞれの変化は異なるが、共通点は明代に大きな変化があり、現代語に近い表記になったという点である。

さて、われわれは『改定元賢傳記』を論じる前に、元雜劇のもう一つの重要な版本を見ておく必要があるだろう。それは『改定元賢傳記』(以下、「李開先本」と略称する)の出版時期を考察するうえでも非常に大きな影響を及ぼすと思われるからである。それは『脈望館鈔校本古今雜劇』である。

## 2. 『脈望館鈔校本古今雜劇』

『脈望館鈔校本古今雜劇』(以下、『脈望館』と略称する)に収められている各版本は、概ね古名家本、息機子本と内府本、于小穀本及びその他の5種に分けることができる。前二者は刊本、後二者は抄本である。その他に含まれるものは、慎重な検討を加えれば、あるいは他の四種の版本に帰属させることができるかも知れないが、今後の課題であり、今は触れない。

## 2.1 古名家本と息機子本

『脈望館』四種の版本のうち、刊本である古名家本と息機子本の二種の版本における上の四つの異体字の使用状況を表にしてみると、表1のようになる。

表1 古名家本と息機子本における四種の異体字

刊本名		里	裡	哩	荒	慌	交	教	元来	原来
古名家本	寶娥冤	0	2	1	5	0	0	4	0	2
	金錢池	6	0	0	0	0	0	8	0	0
	救風塵	17	0	0	1	0	0	6	0	5
	蝴蝶夢	8	0	0	6	1	0	25	0	0
	薦福碑	5	0	0	0	0	2	8	0	0
	岳陽樓	17	0	0	1	0	(1)	4	1	1
	後庭花	13	0	0	5	0	0	46	1	5
	倩女離魂	10	0	0	1	0	1	9	1	6
	勘頭巾	25	0	0	8	0	0	2	0	5
	王粲登樓	0	0	8	0	3	0	6	0	0
	酷寒亭	8	0	0	2	0	0	1	0	2
謝天香	16	0	0	0	1	0	9	0	4	
息機子本	忍字記	0	0	18	0	3	(2)	2	(1)	9
	梅香	0	0	32	0	16	0	26	0	8
	看錢奴	0	0	28	0	2	0	7	0	2
	生金閣	0	1	18	0	9	0	4	0	3
	切繪旦	0	0	7	0	0	0	1	0	2
	東堂老	0	0	61	1	1	0	8	0	1
	留鞋記	0	0	6	0	3(1)	(4)	12	0	8(1)
	連環計	0	0	18	0	4	0	9	0	11
	九世同居	0	0	5	0	0	0	2	0	1

(注) 1. ( )に入れたのは、欠業などの原因により補われた用例の数。

2. 『酷寒亭』は古名家本ではないが、参考として挙げた。

表1から、およそ次のようなことが言えるだろう。

1. “li” の表記法は古名家本と息機子本では明らかに異なっている。古名家本は『寶娥冤』『王粲登樓』以外は、全て基本的に“里”を使っているが、息機子本は逆に『生金閣』を唯一の例外として、すべて“哩”を使っている。
2. “huang” も同様の傾向が見られ、古名家本は『蝴蝶夢』『王粲登樓』

『謝天香』以外、基本的に“荒”を用いるが、息機子本は『東堂老』以外、基本的にすべて“慌”を使っている。

3. “jiao” “yuanlai” となると、古名家本と息機子本はそれほど大きな違いは認められず、主として“教” “原来” が使われ、“交” “元来” は極めて少ない。

この現象は何を物語っているのでしょうか。これは古名家本と息機子本が出版された時の状況が異なっているものであり、出版時に古名家本が息機子本より手の加わり方が少なかったため、古名家本の方が古い状態を残している現われなのである。

では、二種の抄本はどうであろう。次に抄本を見てみよう。

## 2.2 内府本と于小穀本

上で見てきた古名家本、息機子本と同じように、抄本における四つの文字の表記法を調べると、表2のようになった。

表2 内府本と于小穀本における四種の異体字

抄本名		里	裡	哩	荒	慌	交	教	元来	原来
内 府 本	五 侯 宴	16	0	0	0	2	0	9	0	6
	陳母教子	18	0	0	0	2	0	8	0	1
	汗 衫 記	22	0	0	0	1	0	9	0	9
	趙禮讓肥	2	0	2	2	7	0	1	0	1
	桃 花 女	29	0	0	0	4	0	8	0	3
	賺 蒯 通	4	0	0	0	0	0	2	0	0
	小 尉 遲	6	0	0	0	0	0	4	0	2
	燕青博魚	14	0	0	0	1	0	0	0	3
	任 風 子	7	0	0	0	1	0	5	0	5
于 小 穀 本	莊 周 夢	4	0	0	1	0	6	1	0	0
	剪髮侍賓	6	0	0	0	0	3	2	0	0
	渭塘奇遇	5	0	0	0	0	4	0	3	0
	誤失金環	11	0	1	0	3	13	0	1	0
	東 墻 記	6	0	0	1	1	34	2	1	0
	桃 符 記	14	0	0	0	①	1	1	2	0
	遇 上 皇	8	0	0	1	0	10	1	0	1
	貶 黃 州	2	0	0	1	0	2	7	0	1
黃 花 峪	6	0	0	4	0	4	0	1	1	

(注) 数字に○印を付したのは“慌”という字ではなく、“慌”の異体字である。

表2から、およそ次のようなことが言えるであろう。

1. “li” の表記は内府本、于小穀本ともに同じ傾向にあり、基本的に“里”という古い表記法になっている。
2. “huang” に関しては内府本が基本的に“慌”であるのに対し、于小穀本は“荒”をある程度残している。
3. “jiao” では、内府本がすべて“教”であるのに対し、于小穀本は古い表記法の“交”をかなり残している。
4. “yuanlai” も同じ傾向がうかがえ、内府本がすべて新しい表記法である“原来”を使っているのに対し、于小穀本は古い表記法の“元来”が多く残されている。

このように、四種の異体字をめぐって『脈望館』の四種の版本はかなり違った使い方をしているのである。それは新たに手が入るほど、新しい表記法に変わっていきっていると判断してよいという傾向にある。では、問題の『改定元賢傳記』の場合は一体どのような状況にあるのであろうか。次にそれを見ることにしよう。

### 3. 李開先本

今、李開先本における四種の異体字の頻度数を見ると表3のようになる。

表3 李開先本における四種の異体字

刊本名		里	裡	哩	荒	慌	交	教	元来	原来
李 開 先 本	青衫泪	2	0	1	4	0	1	18	3	3
	陳搏高卧	0	0	0	0	0	0	16	1	2
	揚州夢	0	0	0	0	0	0	3	0	5
	梧桐雨	0	0	4	4	0	1	13	2	0
	两世姻縁 誤入桃源	0	0	9	3	0	0	22	1	2
	総計	2	0	14	12	0	2	73	7	14

表3を見れば、李開先本は“荒”以外、すべて手が加わっているのは明らかである。そうした改定のうち、『青衫泪』に“里”が2個、“荒”が4個、

“元来”が3個残されているが、李開先本のうち、この『青衫泪』が最も手の加わり方が少なかったものとおもわれる。

### 3.1 脈望館本と李開先本

では、李開先本と脈望館本の各版本とでは、どちらがより古いものを残しているのだろうか。表2と表3の数字を眺めているだけでは埒が開かないので、ここで判断しやすい方法を考えてみよう。それは非常に簡単な方法で、古い表記法を残しているものを+、改定が行われているものを-で表し、どちらとも判定しかねるものは±で表すのである。それを示したのが、表4である。

表4 五種の版本の新旧対比

	古名家本	息機子本	内府本	于小穀本	李開先本
哩	+	-	+	+	-
慌	+	-	-	±	+
教	-	-	-	+	-
原来	-	-	-	+	±

表4から次のようなことが言えるだろう。

五種のうち、息機子本の手の加わり方が最も大きく、これと対極にあるのが于小穀本である。李開先本は内府本にやや近く、内府本と古名家本の間に位置すると見るのが最も適切だといえる。では、李開先本は一体何時頃の文字表記を反映した版本なのであるだろうか。次にその問題を考えてみよう。

### 3.2 李開先本は何時頃の文字状況を反映している版本か

この問題を明らかにするため、二種の文字の異体字を検討してみよう。方位詞“li”と量詞“ge”の表記法である。それは両者が元明間にかなり顕著な変化を見せるためである。

#### 3.2.1 方位詞“li”

元末、明初、中期において、出版時期が比較的明確ないくつかの資料を利用して、方位詞“li”の使用頻度を調査してみると、表5のようになった。<sup>(9)</sup>  
(表中“裡1”“裡2”とは、それぞれ“裡”“裡”を指す)



表5 元末, 明初中期 “li” の使用頻度

	裏	里	裡1	裡2
1 太平樂府 (至正 11年 [1351])	87	123	4	0
2 大誥武臣 (洪武 21年 [1388])	40	0	0	0
3 辰鈞月 (永樂 2年 [1404])	12	10	0	0
4 義勇辭金 (〃 14年 [1416])	10	8	0	0
5 降獅子 (〃 14年 [1416])	5	5	0	0
6 蟠桃會 (宣德 4年 [1429])	4	0	0	0
7 八仙慶壽 (〃 7年 [1432])	14	2	0	0
8 常椿壽 (〃 8年 [1433])	5	13	0	0
9 復落娼 (〃 8年 [1433])	26	4	0	0
10 十長生 (〃 9年 [1434])	4	3	0	0
11 神仙會 (〃 10年 [1435])	6	3	0	0
12 嬌紅記 (〃 10年 [1435])	55	174	0	0
13 薛仁貴 (成化 7年 [1471])	25	1	0	0
14 石郎駙馬 (〃 7年 [1471])	13	30	0	0
15 歪烏盆 (〃 8年 [1472])	10	3	0	0
16 朱子語類 (〃 9年 [1473])	( ?	? )	2	4
17 開宗義 (〃 13年 [1477])	12	2	0	0
18 出身傳 (〃 ?年 [ ? ])	1	9	0	0
19 陳州糶米 (〃 ?年 [ ? ])	14	1	0	0
20 認母傳 (〃 ?年 [ ? ])	5	31	0	0
21 曹國舅 (〃 ?年 [ ? ])	15	19	0	0
22 張文貴 (〃 ?年 [ ? ])	5	0	0	0
23 白虎精 (〃 ?年 [ ? ])	5	1	0	0
24 看燈傳 (〃 ?年 [ ? ])	8	29	0	0
25 孫文儀 (〃 ?年 [ ? ])	1	22	0	0
26 孝義傳 (〃 ?年 [ ? ])	1	0	0	0
27 白兔記 (〃 ?年 [ ? ])	49	90	0	0
28 西廂記 (弘治 11年 [1498])	11	157	0	0
29 琵琶記 (嘉靖 27年 [1548])	49	148	57	1(1)
30 寶劍記 (〃 28年 [1549])	11	88	24	0
31 古董解元 (〃 36年 [1557])	51	0	79	0
32 十段錦 (〃 37年 [1558])	212	8	8	4
33 古名家本 (萬曆 17年 [1589])	4	332	47	0

(注) 数字には“這里/那里の”の“li”も含まれている。

表5から、およそ次のようなことがいえるであろう。

1. “裡1”は元末の『太平樂府』や成化期の『朱子語類』でもいくつかの用例が見られるが、まだ普及したとは言えず、“裡1”の普及は嘉靖

以降と見るべきであろう。

2. “裡2”の出現は“裡1”より遅く，“裡1”同様、『朱子語類』に若干の用例が見られるが、嘉靖期でもまだあまり多く用いられておらず，“裡2”の普及は萬曆以降とすべきであろう。

では、問題の李開先本はどうであろうか。李開先本における方位詞“li”の使用頻度を示してみると表6のようになる。

表6 李開先本における方位詞“li”の使用頻度

刊本名	作 品	裏	里	裡1	裡2
李 開 先 本	青 衫 泪	0	20	26	0
	陳 搏 高 卧	1	5	16	0
	揚 州 夢	0	12	5	0
	梧 桐 雨	0	9	4	0
	兩 世 姻 縁	5	2	29	0
	誤 入 桃 源	0	4	21	0
	合 計	6	52	101	0

表6で注目されるのは、李開先本に“裡2”の用例がないということである。李開先本の方位詞“li”の使用頻度に最も近いものを表5で求めるならば、30の『寶劍記』と33の『古名家本』ということになる。

では、量詞“ge”の場合はどうであろうか。次に“ge”の場合を見てみよう。

### 3.2.2 量詞“ge”

方位詞“li”と同じように、量詞“ge”の使用頻度を一覧表にすると表7のようになる。

表7からおおよそ次のようなことが言えるだろう。

1. “個”は『成化説唱詞話叢刊』で若干使われているものの、これをもって“個”が普及したとは言えない。
2. 嘉靖期の『古本董解元西廂記』でも少し使われているが、まだ“個”が普及したとは言いがたい。32の古名家本では“個”が普及したと言えるのであるが、残念ながら表7の31の『雜劇十段錦』から32の古名家本

表7 元末, 明初, 中期における“ge”の使用頻度

	箇	个	個
1 太平樂府 (至正 11年 [1351])	156	92	0
2 大誥武臣 (洪武 21年 [1388])	26	0	0
3 辰 鈞 月 (永樂 2年 [1404])	52	0	0
4 義勇辭金 (〃 14年 [1416])	16	0	0
5 降 獅 子 (〃 14年 [1416])	11	0	0
6 蟠 桃 會 (宣德 4年 [1429])	28	0	0
7 八仙慶壽 (〃 7年 [1432])	22	0	0
8 常 椿 壽 (〃 8年 [1433])	28	0	0
9 復 落 娼 (〃 8年 [1433])	68	0	0
10 十 長 生 (〃 9年 [1434])	13	0	0
11 神 仙 會 (〃 10年 [1435])	40	0	0
12 嬌 紅 記 (〃 10年 [1435])	70	73	0
13 薛 仁 貴 (成化 7年 [1471])	1	38	0
14 石郎駙馬 (〃 7年 [1471])	0	47	0
15 歪 烏 盆 (〃 8年 [1472])	0	58	0
16 開 宗 義 (〃 13年 [1477])	0	53	0
17 出 身 傳 (〃 ?年 [ ? ])	0	21	1
18 陳州糶米 (〃 ?年 [ ? ])	0	61	0
19 認 母 傳 (〃 ?年 [ ? ])	0	36	0
20 曹 國 舅 (〃 ?年 [ ? ])	5	88	8
21 張 文 貴 (〃 ?年 [ ? ])	0	41	0
22 白 虎 精 (〃 ?年 [ ? ])	0	13	0
23 看 燈 傳 (〃 ?年 [ ? ])	1	28	3
24 孫 文 儀 (〃 ?年 [ ? ])	2	35	0
25 孝 義 傳 (〃 ?年 [ ? ])	0	52	0
26 白 兔 記 (〃 ?年 [ ? ])	4	127	0
27 西 廂 記 (弘治 11年 [1498])	178	0	0
28 琵琶記 (嘉靖 27年 [1548])	29	213	0
29 寶 劍 記 (〃 28年 [1549])	117	2	0
30 古董解元 (〃 36年 [1557])	220	0	6
31 十 段 錦 (〃 37年 [1558])	395	1	0
32 古名家本 (萬曆 17年 [1589])	244	353	81

の間には30年という差がある。この間に“個”がどのように普及したのかということをも具体的に指摘するのは非常に難しい。表7から，“個”の普及は、嘉靖の後期から萬暦にかけてであろうということしか指摘できない。

では、李開先本の場合はどうであろうか。李開先本の使用頻度を示し

たのが表8である。

表8 李開先本における量詞“ge”の使用頻度

刊本名	作 品	箇	个	個
李 開 先 本	青 衫 泪	39	0	1
	陳 搏 高 卧	18	0	3
	揚 州 夢	30	0	0
	梧 桐 雨	22	0	0
	两 世 姻 縁	13	0	33
	誤 入 桃 源	23	0	0
	合 計	145	0	37

表8から、李開先本ではかなりの数の“個”が使われていることがわかり、李開先のもう一つの作品とされる『寶劍記』で“個”を全然使っていなかったのとは明らかに異なる。この“個”の出現率から見れば、李開先本は『寶劍記』より些か遅く出版された可能性がある。

李開先本における“ge”の使用頻度を、表7の元末、明初、中期の“ge”の使用頻度とを比べてみると、表8の数値に最も近いのは嘉靖期の『古本董解元西廂記』ということになる。

## まとめ

3.2.1で見たように、方位詞“li”の異体字の使用頻度から考えれば、『寶劍記』と『古名家本』が李開先本に最も近いと言える。一方、3.2.2の量詞“ge”の異体字の使用頻度からすれば、『古本董解元西廂記』が李開先本に最も近いという結果が出た。時間にすれば嘉靖28年(1541)から萬曆17年(1589)の間ということになる。

路工1959は次のように述べている。

自五十三歳至六十五歳(1555—1567)這期間内，他一直住在家中，搜集古代戲曲和名畫。曾經和他弟子一起刪定元人雜劇十六種。<sup>(9)</sup>

また、岩城秀夫1961では、

「十段錦」は明の周憲王朱有燾の雜劇十種を集めたもので、嘉靖37年

(1558), 紹陶室の刊行にかかるから、「改定元賢傳奇」はこれ以後、嘉靖末年に至る間の刊行とみられる。<sup>(1)</sup>

と述べている。路工はその判断の根拠は述べていないが、両者の『改定元賢傳記』の成立に対する推定時期はほぼ一致しており、状況証拠面からは嘉靖37年～嘉靖45年ということになる。われわれの関心事はそれが成立、出版された時、どれほどの手が加えられたかということにある。

この問題に関して、李開先本を精査された赤松紀彦2001では次のように述べられている。

『改定元賢傳記』は、従来、(中略—佐藤)元刊本に近い、古いかたちを残しているのではないかという推測を生んできた。しかしながら、以上に述べたとおり、実際にはのちの明刊本と同じ系統に属することは明らかであり、むしろ明抄本、明刊本各テキストの関係を考える上での貴重な資料となるものである。<sup>(2)</sup>

李開先本は元刊本とはほど遠いというのが氏の結論であろうが、筆者も同感である。李開先自身、

悉訂正之<sup>(3)</sup>

と述べているが、それはかなり徹底した「改定」であったらしい。

では李開先本に反映された言語はどの時期に置かれるべきであろうか。小論では、資料不足により、嘉靖37年から萬曆17年という30年間の空白になっているため、その30年間のどの時期という決定的な結論を出すには至らなかったが、異体字の変化という観点から、いわば内的証拠を根拠として、『改定元賢傳記』の言語が、嘉靖37年萬曆17年の間の言語状況—つまり成立、出版時期の言語状況—の反映であるという指摘はできたと考える。

## 注

- (1) ト鍵2004によれば、『改定元賢傳記』を目睹したのは、ト鍵氏以外に趙萬里氏もいたという(『李開先全集』p.1702)。赤松紀彦2001によれば、解玉峰氏(南京大学)も目睹されているであろう(p.16)。

- (2) 太田辰夫1958 pp.379～pp.381
- (3) 佐藤晴彦1991, 1999参照。
- (4) 注(2)に同じ。p.382
- (5) 佐藤晴彦1986, 1998参照。
- (6) 注(2)に同じ。pp.240～pp.241
- (7) 佐藤晴彦1986参照。
- (8) 注(2)に同じ。p.274
- (9) 使用したテキストは次の通り。

太平樂府：四部叢刊本

大誥武臣：『皇明制書』上卷（1966年1月，古典小説研究会）

辰 鈞 月：周藩原刻本（中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本）

義勇辭金：　　〃　　（『全明雜劇4』臺灣鼎文書局，1979年影印本）

降 獅 子：　　〃　　〃

八僊慶壽：　　〃　　（中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館本）

常 椿 壽：　　〃　　〃

十 長 生：　　〃　　〃

神 仙 會：　　〃　　〃

嬌 紅 記：『古本戲曲叢刊初集』

薛 仁 貴：『明成化說唱詞話叢刊』（臺灣鼎文書局，1979年影印本所収）

石郎駙馬：　　〃　　〃

歪 烏 盆：　　〃　　〃

朱子語類：『朱子語類』（臺灣正中書局，1973年影印本）

開 宗 義：『明成化說唱詞話叢刊』（臺灣鼎文書局，1979年影印本所収）

出 身 傳：　　〃　　〃

陳州糶米：　　〃　　〃

認 母 傳：　　〃　　〃

斷曹國舅：　　〃　　〃

張 文 貴：　　〃　　〃

斷白虎精：　　〃　　〃

看 燈 傳：　　〃　　〃

孫 文 儀：　　〃　　〃

孝 義 傳：　　〃　　〃

白 兔 記：　　〃　　〃

西 廂 記：『奇妙全相註釋西廂記』（臺灣世界書局，1976年影印本）

琵琶記：『新刊元本蔡伯喈琵琶記』（『全明傳奇』所収。但し，不鮮明な箇所は『古本戲曲叢刊初集』本で確認した）

寶 劍 記：『古本戲曲叢刊初集』

古董解元：『古本董解元西廂記』（中華書局，1963年影印本）

十 段 錦：『雜劇十段錦』（嘉靖戊午仲夏紹陶室刊）

16の『朱子語類』の数字を( )で括ったのは、『朱子語類』すべてを調査したわけではなく，

塩見邦彦1985に據ったためである。29の『琵琶記』の“裡2”が「1(1)」となっているのは、確実に“裡2”と認定できるのが一箇所、文字が不鮮明なため“裡2”と断定はできないが、“裡2”らしいと思えるのが一箇所という意味である。

- (10) 路 工 1959, p.1035
- (11) 岩城秀夫 1961 (岩城秀夫1973, p.561)
- (12) 赤松紀彦 2001, p.23
- (13) 『改定元賢傳記』序

### 参考文献

- 赤松紀彦 2001「南京図書館蔵『改定元賢伝奇』について 附「陳搏高臥」,「青衫泪」校勘記」『中国における通俗文学の発展及びその影響』(平成10-12年度科学研究費補助金研究成果報告書)所収
- 卜 鍵 2004「改定元賢傳記提要」『李開先全集』文化芸術出版社
- 岩城秀夫 1961「元刊古今雜劇三十種の流傳」(小論では、『中國戲曲演劇研究』1973 創文社を使用)
- 太田辰夫 1958『中國語歴史文法』江南書院
- 小松 謙 1991「内府本系諸本考」『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』(汲古書院)所収(後、『中國古典演劇研究』2001年, 汲古書院, に収録)
- 2000「『脈望館鈔校本古今雜劇』考」『日本中國學會報』第五十二集(後, 『中國古典演劇研究』2001年, 汲古書院, に収録)
- 路 工 1959『李開先集』中華書局
- 齊森華等 1997『中国曲芸大辞典』浙江教育出版社
- 佐藤晴彦 1986「《清平山堂話本》《熊龍峯小説》と『三言』—馮夢龍の言語的特徴を探る—」『神戸外大論叢』第37巻第4号
- 1991「近代漢語研究の基本問題—中国旧小説, 戲曲を資料として—」『外国学研究』XXII
- 1998「『脈望館鈔校本古今雜劇』新探」『神戸外大論叢』第49巻第4号
- 1999「容與堂本『水滸傳』成立の一側面」『神戸外大論叢』第50巻第5号
- 塩見邦彦 1985『朱子語類口語語彙索引』(中文出版社)